

大学生の投票行動と政治意識・関心の関連性

千葉商科大学 商経学部 露崎綾乃
指導教員 赤木 茅, 江草遼平

※本研究は「千葉商科大学・数理データサイエンス教育プログラム」における「特別講義(データサイエンス)」の一環として実施されている

目次

- 背景と目的
- 調査の概要
- 結果
- まとめ
- 今後の展望

背景

- 他世代と比較して近年の**10-20代**の若者の投票率が低いことが課題となっていると指摘されている(市村,2012)
- **Z世代**の社会課題への関心や社会貢献が低いわけではないという研究もある(政治学委員会政治過程分科会,2014)

→投票による政治への参加は重要な国民の権利であり,投票率に影響を及ぼす要因の研究には意義がある

背景

- 現代大学生における政治的疎外意識の構造 (山田,1990)
 - 政治的疎遠感
 - 政治的不信感
 - 政治的無力感
- 日本の若者の主権者意識と主権者教育の課題 (宮下,2019)
 - 自治的体験の欠如による無力感の形成

若者の投票率の低下要因について言及しているが、要素の複合的な影響や各変数の影響を統合的に扱ってはいない

目的

- **研究の目的**

- 大学生を対象として第50回衆議院選(2024年10月27日実施)における投票行動に影響を与える要因の結びつきを明らかにすること

- **本研究における投票行動に影響を与える要因**

- 大学生の政治的興味関心や社会課題への興味関心
 - 実際の投票行動に繋がった, または繋がらなかった理由
- これらについてwebアンケートを用いた質問紙調査を行い,その影響の大きさやギャップについて分析を行う

調査方法

- **調査の概要**

- 質問紙(webアンケート)を用いた調査
- 私立文系大学の大学生とした投票行動,理由,政治や社会への興味関心
- 収集したデータについて共分散構造分析を用いた分析を行う

- **質問紙の概要**

- 投票行動に関する質問：3問
- 政治興味に関する質問：10問(我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査より)

- **対象**

- 回答期間:2024/12/23～2024/12/25 (回答時間目安:10～15分)
- 回答数：108件(有効回答62件)

投票行動に関する質問項目

- 第50回衆議院選挙へ投票に行ったか否か(Q1),またその理由(Q2,Q3)を複数選択方式で質問
 - 社会的連帯 (猿渡,2012) → 「同調性」:社会同調的な意識
 - 政治的効能感 (金,2009), 政治不信 (山田,1990) → 「投票価値」:投票が政治に影響を与えられるという信念
 - 無関心 (市村,2012) → 「重要度」:投票を自分事としてとらえるか
 - 投票意思にかかわらない物理的障壁 → 「時間の有無」

各項目は,大学生を対象とする形に適切になるよう作成

投票価値に関する質問項目

投票価値	Q1	あなたは今回の選挙で投票に行きましたか
	Q2	投票に行った理由として、当てはまるものを以下の選択肢から全て選んでください(複数回答可)。選択肢にない理由がある場合については、[その他]に自由に書いてください。
	Q3	行かなかった理由として、当てはまるものを以下の選択肢から全て選んでください(複数回答可)。選択肢にない理由がある場合については、[その他]に自由に書いてください。

←Q1で「はい」と答えた人が回答対象

←Q1で「いいえ」と答えた人が回答対象

Q2の選択項目

同調性 (adjustment)	義務感から
	いつもの習慣から
	周りが行っているため
投票価値 (vote_value)	投票すれば政治が良くなると思うから
	自分の声を反映・届けさせたいから
	社会をよりよくしたいから
重要度 (importance)	投票は自分のことよりも優先すべきことだから
	誰かがどうにかしてくれると思わないから
	面倒じゃなかったから
時間の有無 time_concern)	行く時間があったから
	投票場所に簡単に行けたから(住民票があったから)

Q3の選択項目

同調性 (adjustment)	行かない権利もあるから
	行く習慣がないから
	周囲の人が行かないから
投票価値 (vote_value)	投票しても政治がよくなると思わないから
	自分の声が反映されたり届いたりすると思わないから
	社会がよくなると思わないから
重要度 (importance)	投票に行くよりも自分のことを優先したいから
	誰かがどうにかしてくれると思うから
	面倒だったから
時間の有無 (time_concern)	行く時間がなかったから
	投票場所に簡単にはいけなかったから(住民票がなかったから)
3/15/25	行きたくても行けなかった(病気や家の事情など)

Q2の選択項目と対応する項目となっている

Q2,Q3 を合わせて-3~+3の変数として集計している

社会課題意識に関する質問項目

- 子ども家庭庁によるこどもと若者の意識に関する調査から採用した項目を採用
 - 回答方法は5段階尺度評価
 - 「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらでもない」、「どちらかといえ
ばそう思わない」、「そう思わない」
- 全10問(Q5, Q9, Q12 は逆転項目で,分析時に正順に処理)
- 自分の政治参加が政治過程に影響を与えられる
→ 「政治的効能感」
- 自分の行動によって社会をよくしたいという信念
→ 「社会貢献意識」
- 政治に対する関心や自国社会に関する不満など
→ 「社会課題意識」

逆転項目：

- 他の質問項目とは測定の向きが逆になっている質問
- アンケートの信頼性を高めるため

社会課題意識に関する質問項目

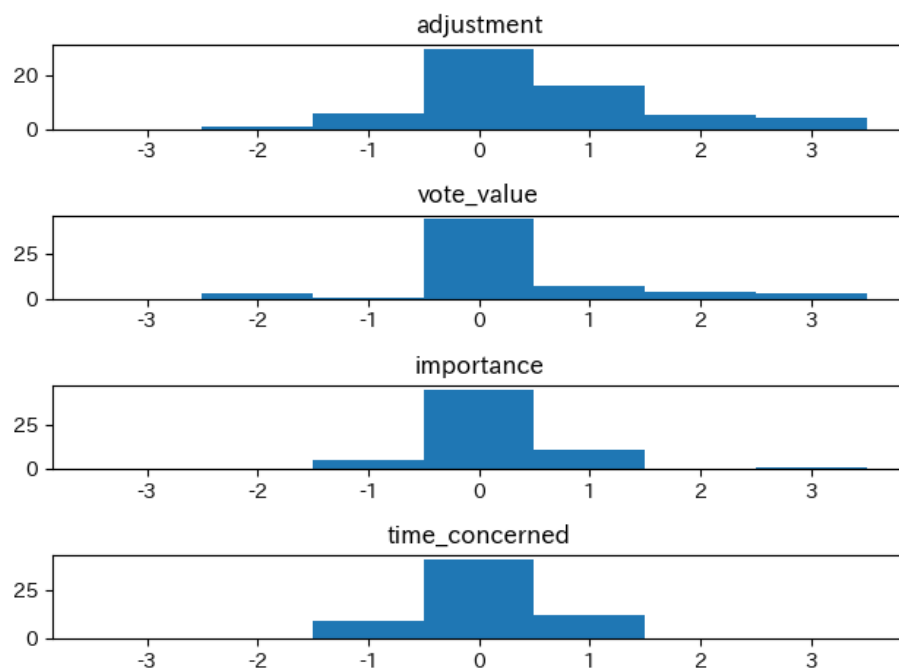
政治的効力感 (political_efficacy)	Q4 効力感(efficacy)	私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない
	Q5 無力感(powerless)	私個人の力では政府の決定に影響を与えられない(逆転項目)
社会貢献意識 (contribution)	Q6 決定意欲(decision)	将来の国や地域の担い手として積極的に政策決定に参加したい
	Q7 役立ちたい(service)	あなたは「社会のために役立つこと」をしたいと思いますか
	Q8 関与意欲(participate)	社会をよりよくするため、私は社会における問題の解決に関わりたい
	Q9 非関与意欲 (inv_participate)	社会のことは複雑で、私は関わりたくない(逆転項目)

社会課題意識 (social_issues)	Q10 興味関心(interest)	あなたの政治への興味関心について最も近いものを選択してください
	Q11 不満足度(dissatisfaction)	あなたは自国の社会について不満に思うことがありますか
	Q12 満足度(satisfaction)	あなたは自国の社会に満足度について、最も近いものを選択してください(逆転項目)
	Q13 意見表明(opinion)	こどもや若者が対象となる政策や制度についてはこどもや若者の意見を聴くようにすべき

手法

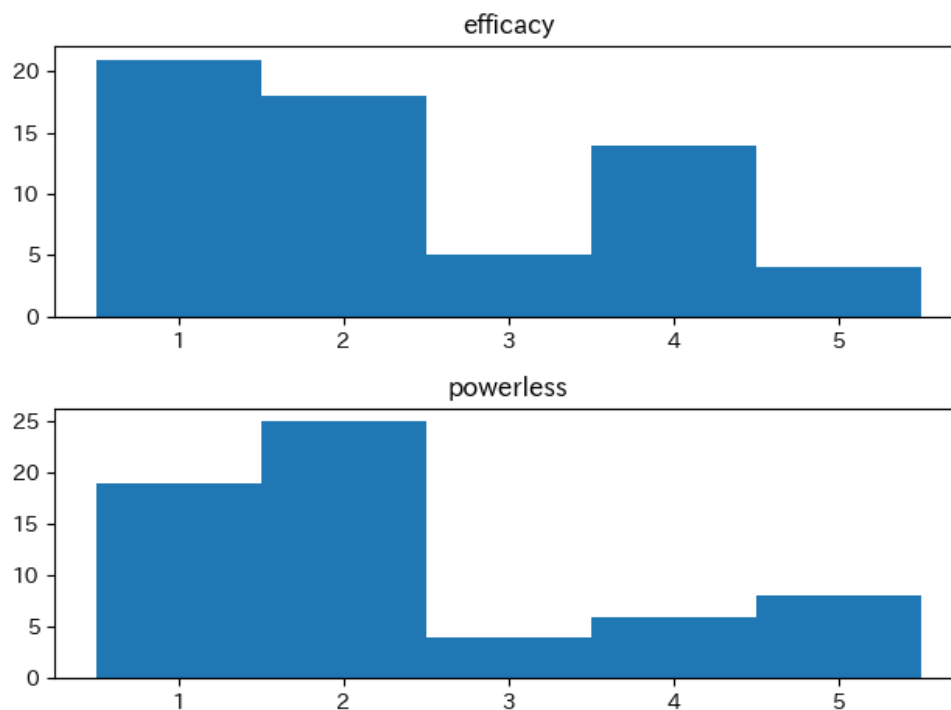
- ヒストグラム
- 相関分析
- 共分散構造分析

ヒストグラム



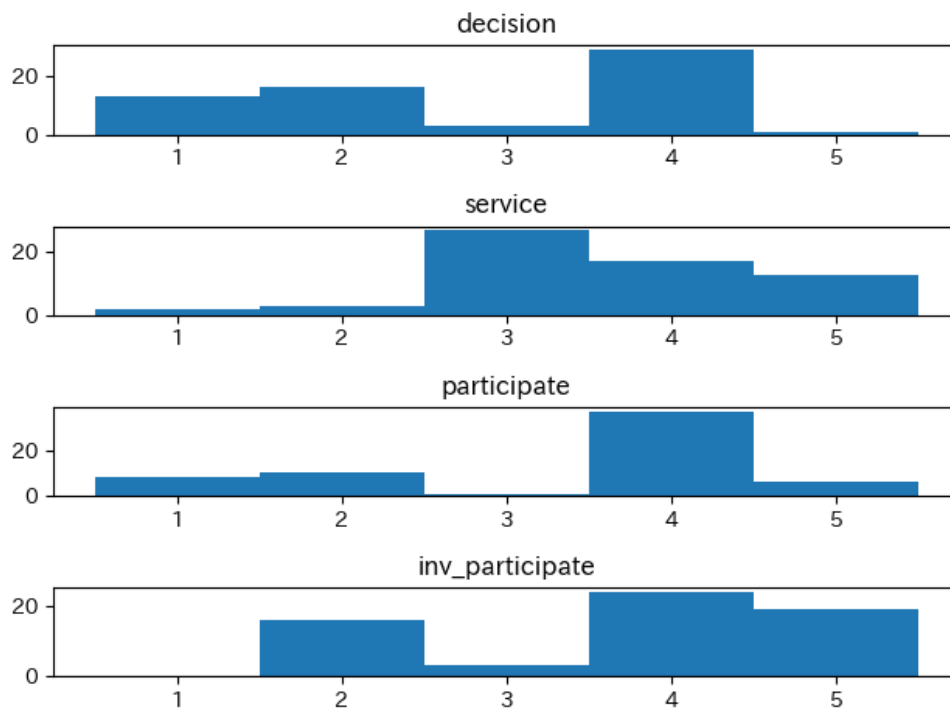
投票行動の理由に関する回答のヒストグラム

- 同調性(adjustment)のみ、やや左に歪みがみられる
- いずれの項目群においても0をピークとした左右対称なヒストグラム
- 投票理由または投票行動に支配的な傾向は存在しない



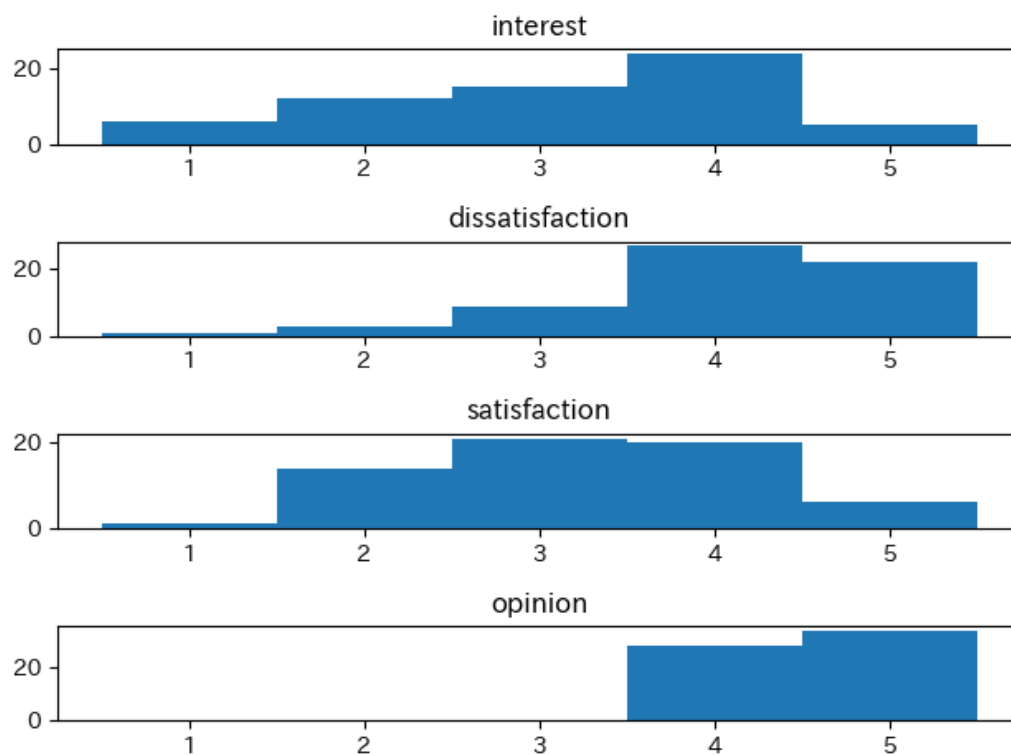
政治的効能感に関する回答のヒストグラム

- 効力感(efficacy) :
右に歪んだ分布で社会現象を少しでも変えられると思っていない傾向
- 無力感(powerless) :
効力感(efficacy)と同様「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の1,2に回答が集まっている
- 大学生の政治的効能感として個人の行動によっては社会現象を変えられない信念が存在



社会貢献意識に関する回答のヒストグラム

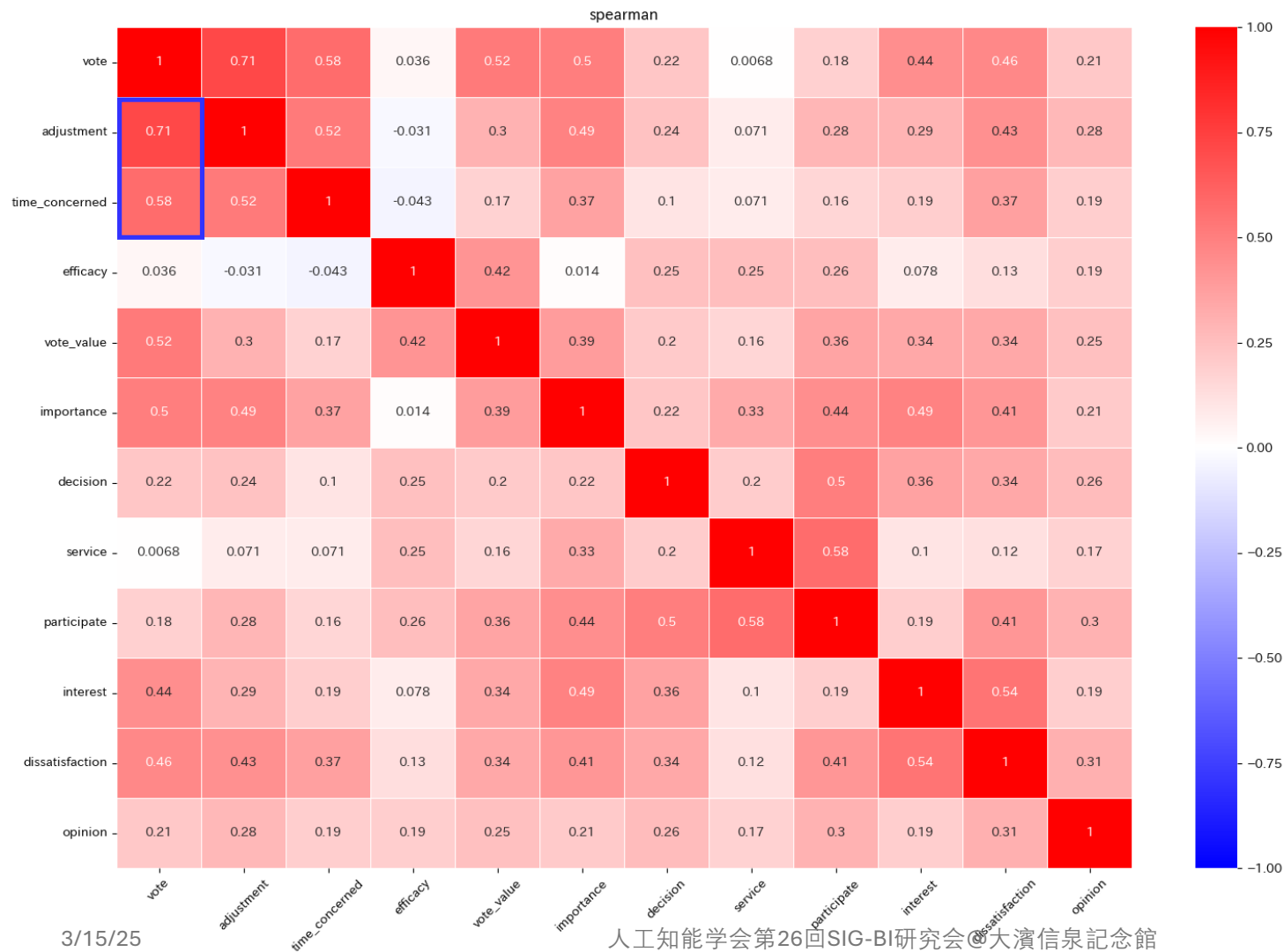
- 決定意欲(decision),関与意欲(participate),非関与意欲(inv_participate):
いずれの項目においてもピークは「どちらかといえばそう思う」の肯定的意見
- 役立ちたい(service):
中立的回答にピークがあるが、否定的回答は少なくやや左にゆがんだ分布
- 社会課題への関心や社会貢献が低いわけではない



社会課題意識に関する回答のヒストグラム

- 満足度(satisfaction)を除いた3項目は左に歪んだ分布
- 意見表明(opinion): 肯定的な回答のみ.現在の政治に対して意見表明を望んでいる学生が多いと推察
- 満足度(satisfaction): 一定の傾向は見えにくい
- 大学生の政治への興味関心,関与への意欲が高い

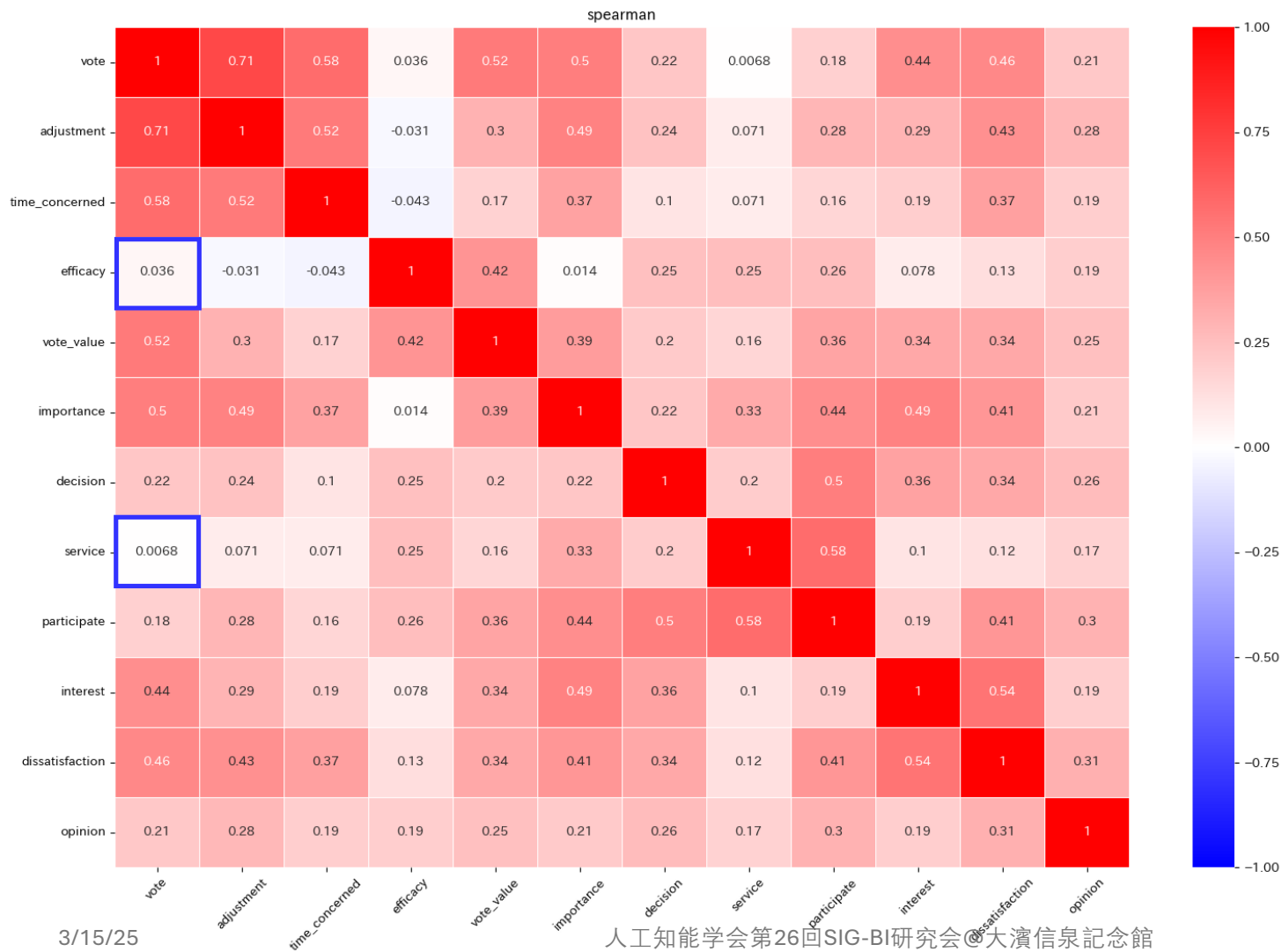
相関係数



- 同調性(adjustment)
- 時間の有無
(time_concerned)

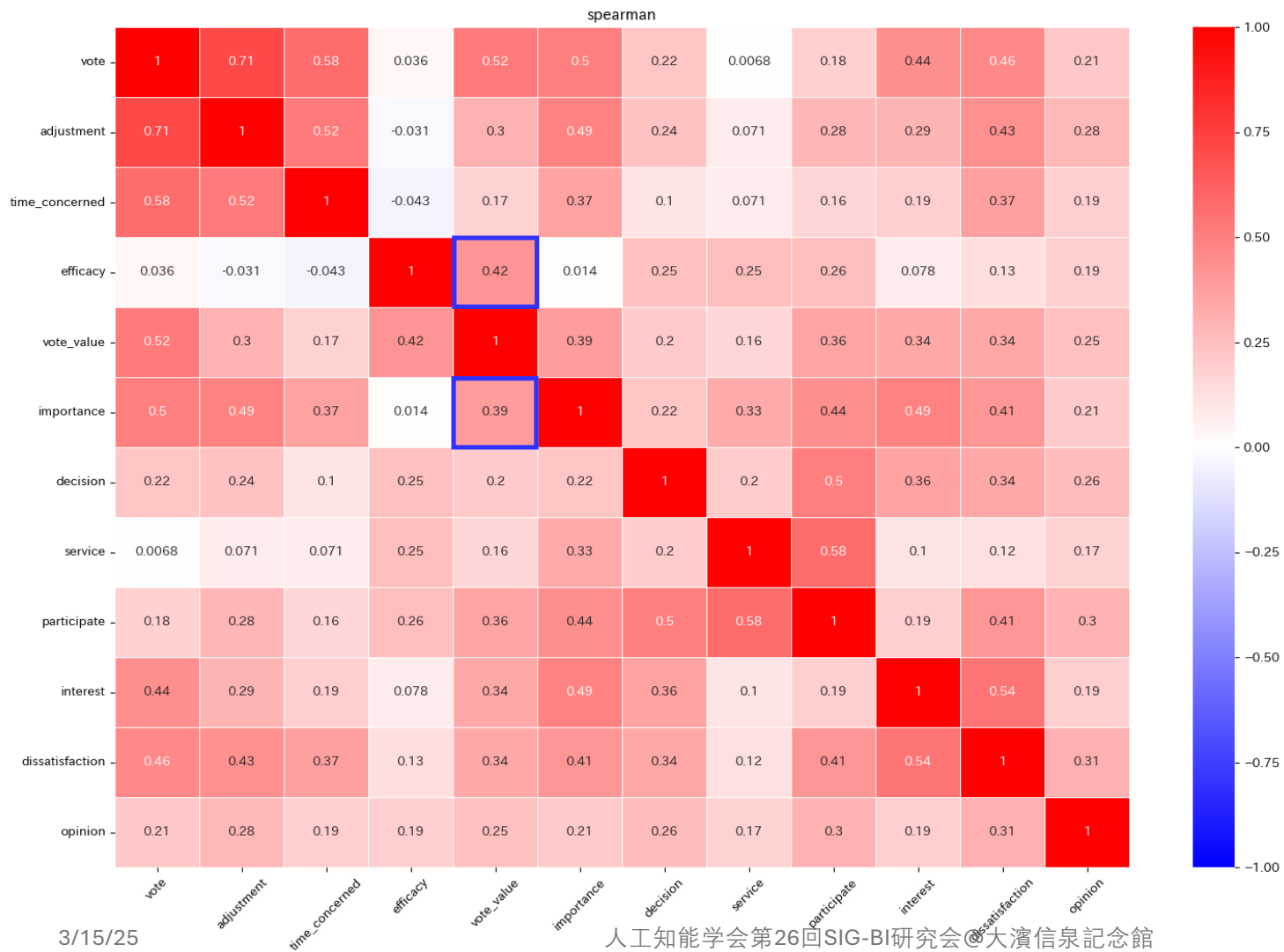
が投票行動(vote)に対する相関がある

- 他の項目に比べて特に相関が強い
- 投票行動(vote)に直接的な関係があると考えられる

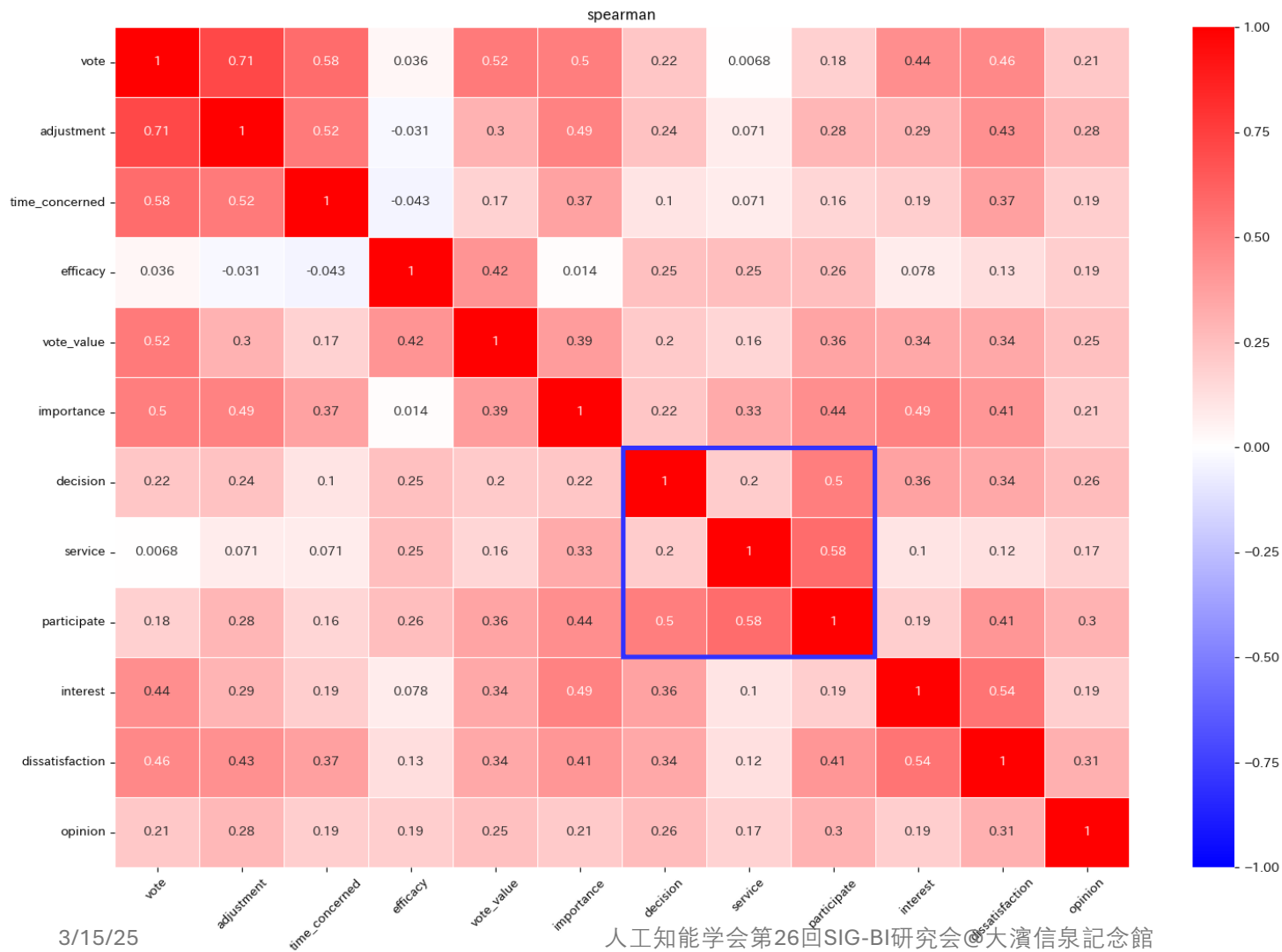


- 政治的効能感に属する効力感(efficacy)
- 社会貢献意識に属する役立ちたい(service)

はそれぞれ投票行動
(vote)に対する直接的な
相関は弱い



- 投票価値(vote_value)を通じて，効力感(efficacy)と重要度(importance)の関係性が示唆される

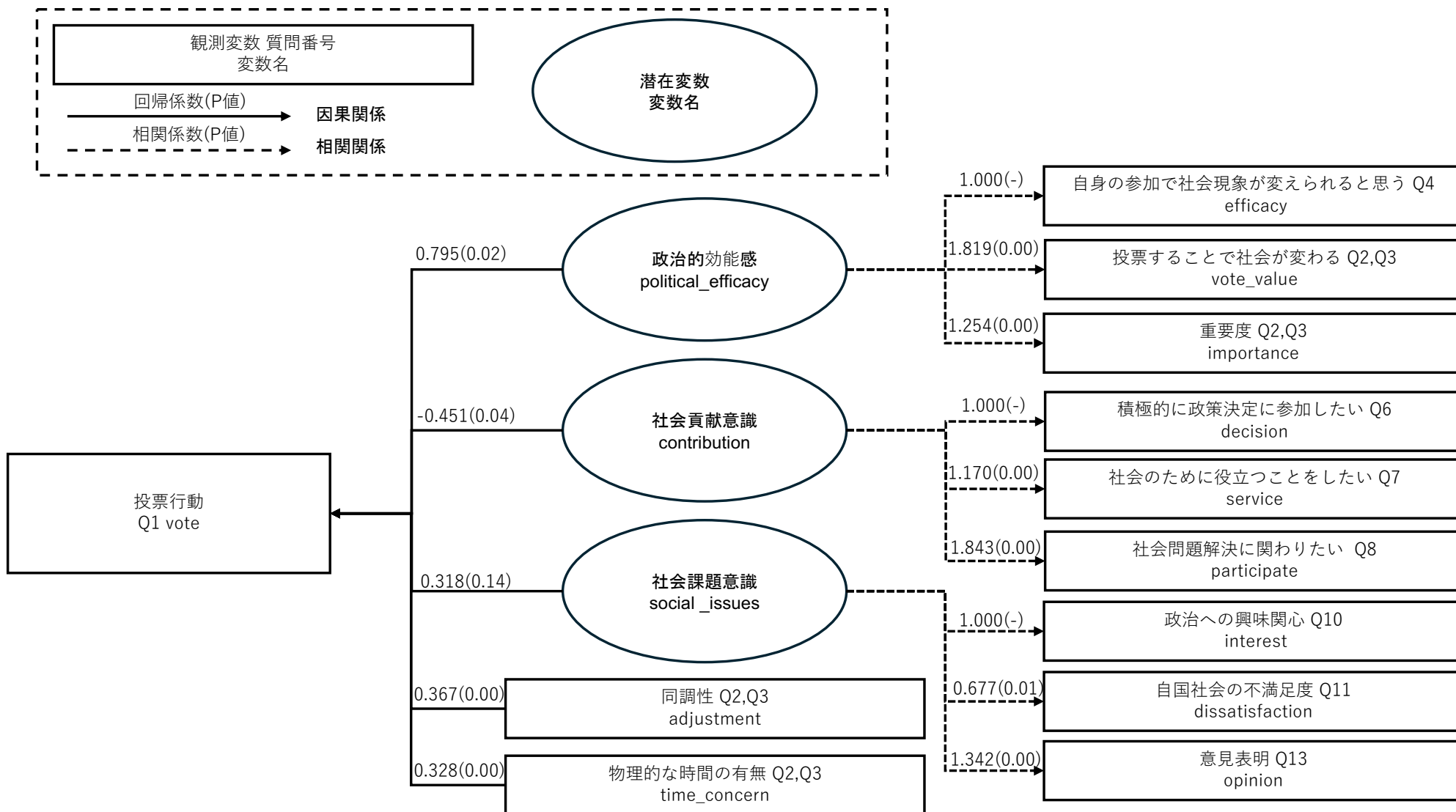


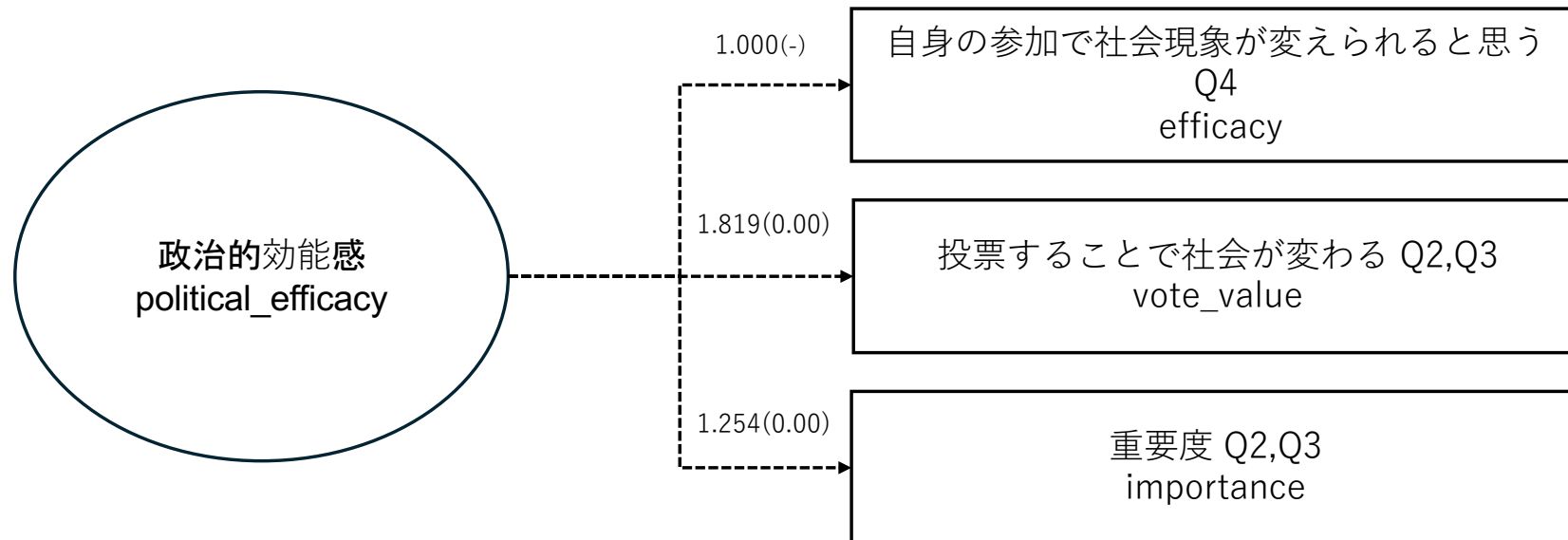
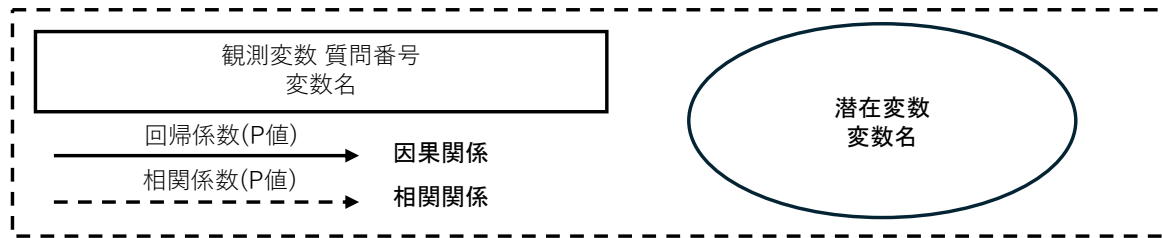
社会貢献意識に属する項目

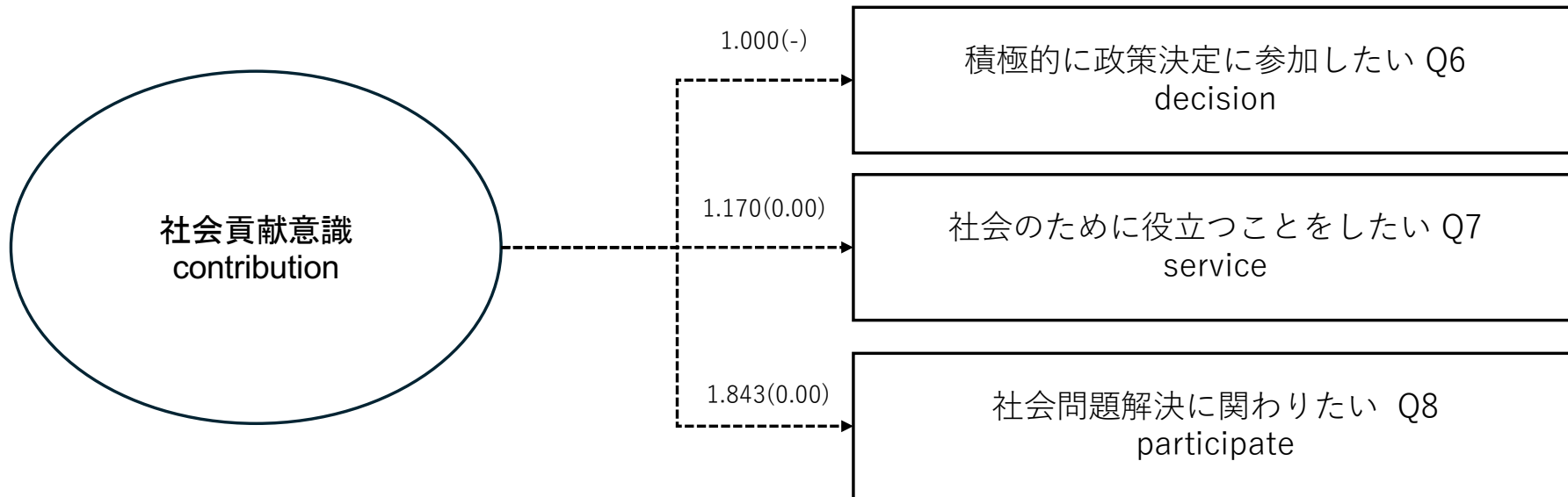
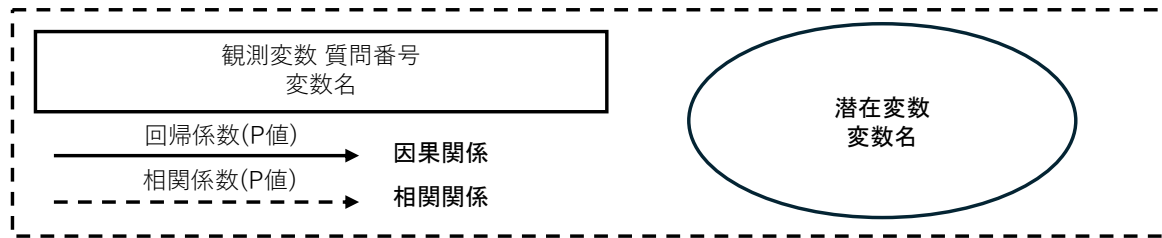
- 関与意欲(participate)
- 役立ちたい(service)
- 決定意欲(decision)

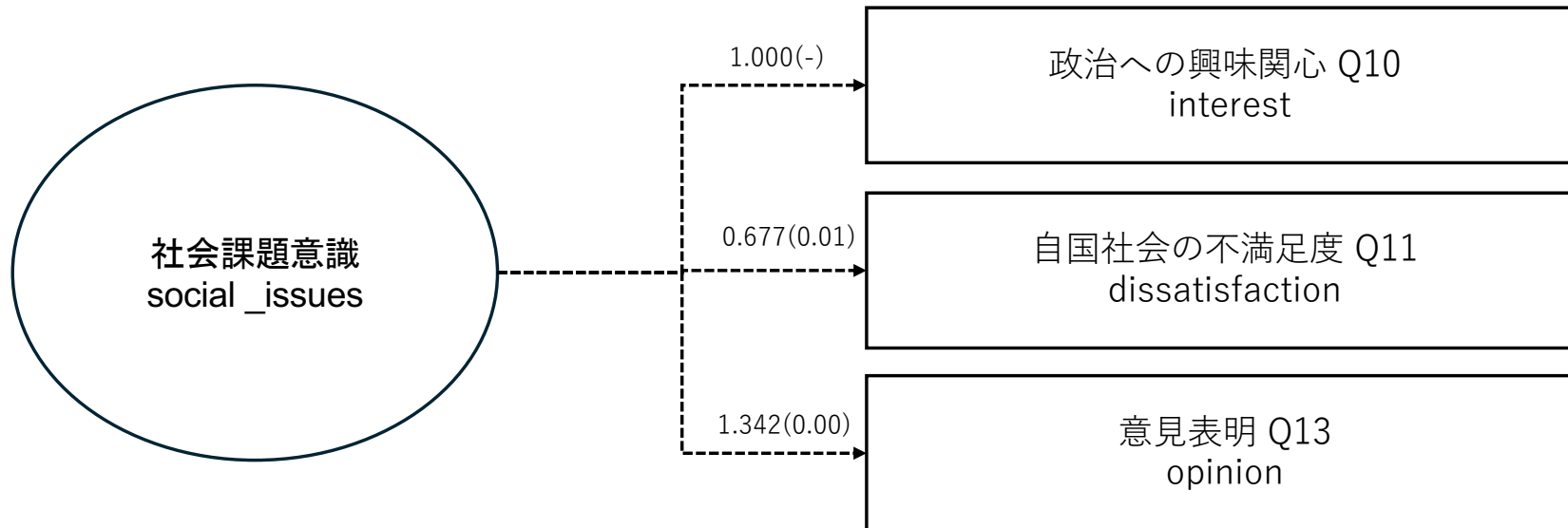
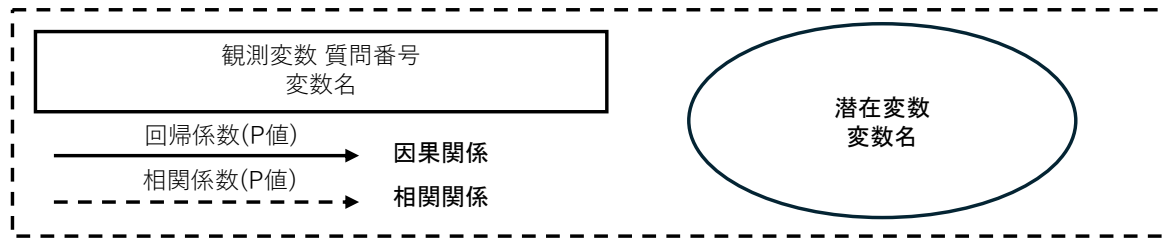
の関係性が**関与意欲(participate)**を通じて見られる

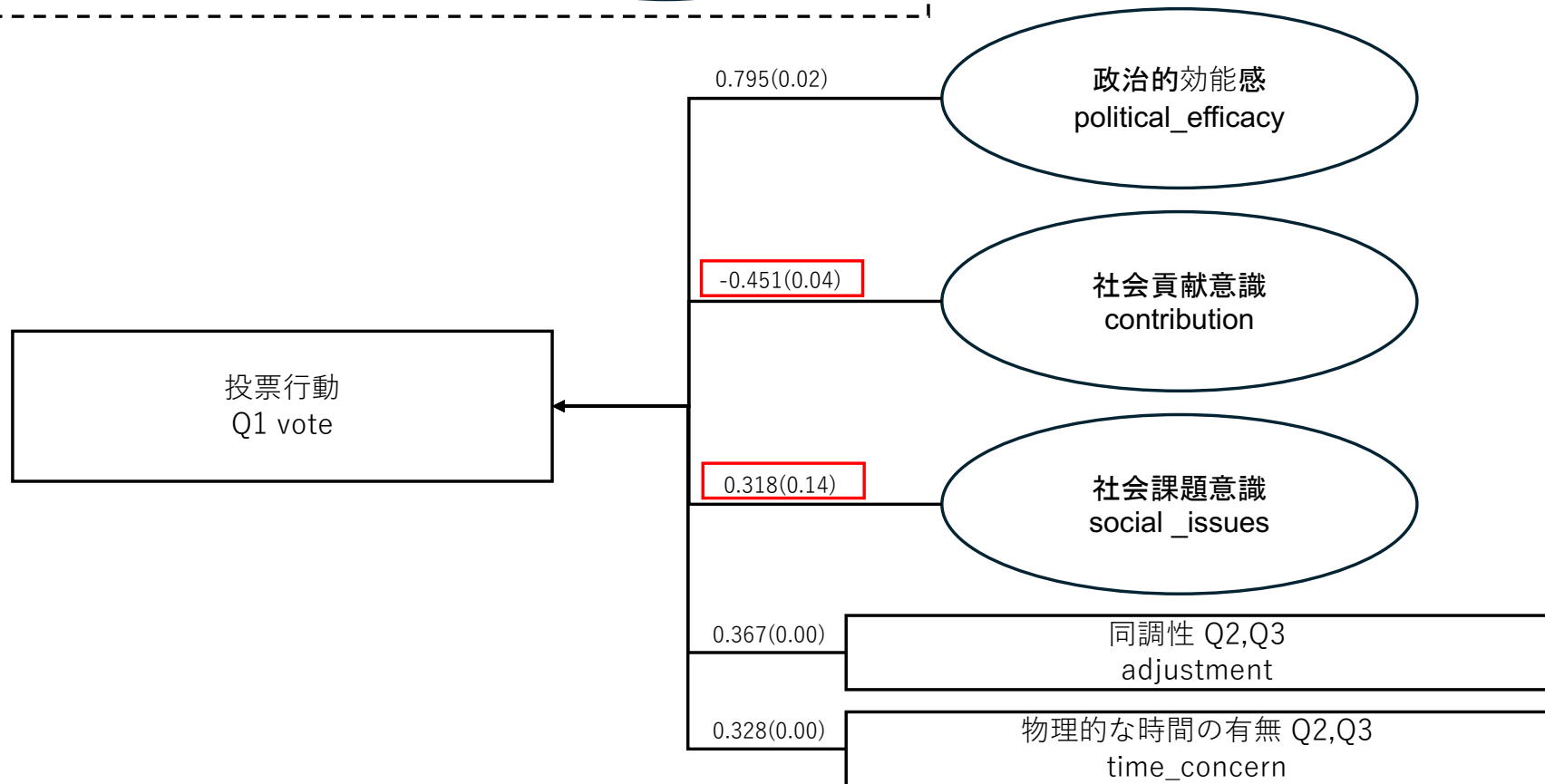
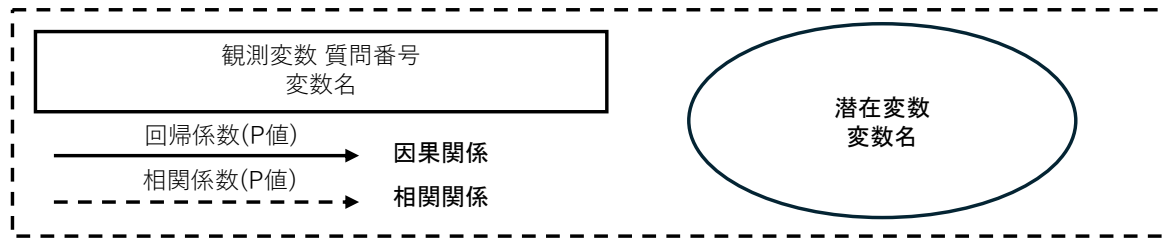
共分散構造分析











まとめ

- **若者の投票率向上に向けて**
- 政治的効能感が投票行動に与える影響が大きい
 - 投票行動の意義や投票に行くことでどのように社会を変えうるのかを考えるといった教育などの活動が有効である可能性
- 物理的な時間の有無が与える影響
 - 若者への期日前投票制度や、住民票の移動などの必要な手続きの周知などが投票率向上に有効であると考えられる
- 同調性が与える影響
 - 投票行動への積極性を若者がアピール
 - 投票行動に行って当然とする雰囲気づくり

今後の展望

- 社会貢献意識は投票行動に対する因果関係は認められたが、貢献したいという意識は投票という政治参加にはマイナスの影響を及ぼす
 - より定性的分析が必要
- 本研究は、先行研究で示された個別の要因と投票行動との関係性を追認したうえで、さらにそれぞれの複合的な関係性を明らかにした
 - モデルにおける因果関係の詳細, 成立理由
 - 具体的な投票行動向上のための施策の提案

参考文献

- 政治学委員会政治学委員会政治過程分科会: 提言 各種選挙における投票率低下への対応策, (2014)
- 宮下与兵衛: 日本の若者の主権者意識と主権者教育の課題, 学校教育研究, 34, pp.37-51, (2019)
- 伊藤誠: 投票率の長期低落傾向と投票義務感: 市議会議員選挙後調査における京都市民の投票義務感の分析を通じて, 政策科学, Vol.19, No.2, pp.76-82, (2012)
- 山田一成: 現代大学生における政治的疎外意識の構造, 社会心理学研究, Vol.5, No.1, pp.50-60, (1990)
- 竹島博之: 意識調査から見た有権者教育の射程と限界—若者の投票率向上のために—, 年報政治学, Vol.67, No.1, pp.1_11-1_30, (2016)

- こども家庭庁: 我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査,(2023)
- 猿渡壮: 基層的な連帯の感覚と投票への参加: 投票参加の深層要因に関する試論的研究, 同志社社会学研究, No.16, pp.71-79, (2012).
- 金相美: 市民の政治参加におけるインターネットの影響力に関する考察 参加型ネットツールは投票参加を促進するのか, 選挙研究, Vol.25, No.1, pp.74-88, (2009)
- 原田唯司: 青年の政治不信に関する一研究, 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇, No.49, pp.307-317, (1999)
- 市村充章: 地域政策動向: 若者の政治参加と投票行動: なぜ若者は投票に行かないのか, 白鷗大学法政策研究所年報, Vol.5, pp.59-102, (2012)